

あなたの理系脳を刺激する、大人のための科学特集!

# 大

# 阪

# 人

10

vol.60  
OCTOBER  
2006



「大阪人も知らない大阪」発見Magazine

特集

「プラネタリウム・  
開演前ルポ」  
「天文学系  
サイエンティスト」  
「科学系学芸員の  
ミッション」  
「物理・化学系  
学芸員ワールド」

# 大科学 阪学 ンティ

科学する面白さ、  
てんこもり!  
大阪市立科学館  
学芸員11人総出演!

「大阪市立電気科学館の歴史」  
「科学都市・大阪の来し方」  
「科学都市の人物誌——間重富」

大阪は江戸時代から  
科学都市だった

【連載】  
ゆきあたりて、まったり 玄月  
「なんやコレ? 大阪」 田中啓文  
「芸人わたくし史列伝」 古川綾子

● 大阪市立電気科学館科学館開館フレ70周年記念



発掘  
the  
OSAKA



事務所棟 通りに面した2階アーチ窓を中心に、左右対称の構え。左手の門柱は、大きく外に張り出した庇(ひさし)状の曲面が印象的。

FILE  
053



右●応接室 事務所棟の2階。天井の球形照明や扇風機はもちろん、内装のほとんどすべてが竣工当時のまま。  
左●会議室 事務所棟の2階にある。2つの窓の間に神棚が祭られているため、求心性の高い空間になっている。天井は蛍光灯以外、当時のまま。

# 久金属工業株式会社

★ 映画のシーンのように

大阪歴史博物館 学芸員 酒井一光

木津川付近の幹線道路には、トラックなどの大型車が行き交う。しかし、南海汐見橋線・木津川駅南方の一角に、昭和三、四十年代を彷彿とさせる町並みがぼつりとある。現実の世界から銀幕の中に迷い込んでしまったかのようだ。都心部で空襲にあったところを除けば、町並みが急変を遂げるのは戦後の高度経済成長期、そしてバブル経済期

大阪のまちを縦横に貫く河川。地図を眺めると、まるで生きものの血管のように見える。中でも大阪港近くを南北に貫く木津川は、大動脈の一つだ。その川沿いには大阪の近代化を支えてきた物流倉庫や工場がひしめき、都市の新陳代謝を活発にしている。今や現実の大動脈は幹線道路に変わってしまったが、川沿いの工場群が持つ都市のアクセントのような働きに変わりはない。

## 町並みを支える工場

### ★建築データ

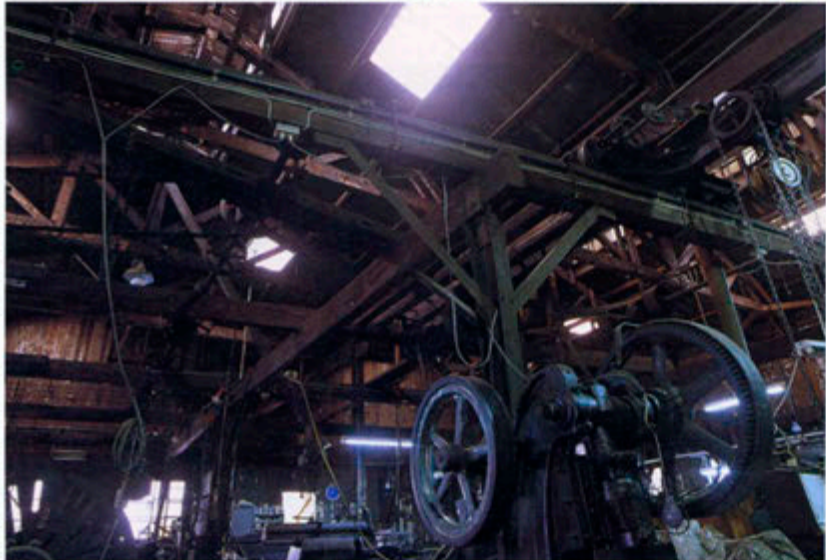
所在地:西成区北津守3-8-31  
建築年:[第1~3工場]昭和9年(1934)  
[事務所棟]昭和12年(1937)  
構造・用途:[事務所棟]木造2階建  
屋根形式:[事務所棟]寄棟造桧瓦葺・庇フランス瓦

旧鉄工場(現・生産技術グループ)外觀 事務所棟と通りをはさんで向かいに建つ。写植機の発明で知られるモリサワの工場として使われた。昭和三十年代に久金属が譲り受け、鉄工場とした。手前にはタイル張りの防火用水槽がある。



上●応接室扉 扉のガラスと板壁。マーブル模様のように見える板は、上からペンキで模様を描いたもの。事務所棟2階では随所にこの仕上げが施されている。  
下●会議室の天井 手前のベルのようなものは電気の中継ボックス。白漆喰を背景に存在感が際立つ。

旧鉄工場(現・生産技術グループ)内部 機械の部品などを製造する。現在は、自社工場を使う



であろう。一変してしまった風景を懐かしむかのように、最近はこの時代に注目が集まっている。

久金属工業があるのは、昔ながらの町並みの中心部。通りに面したその事務所棟はクリーム色のタイル張り。緩やかなカーブを描くアーチ窓を中心に左右対称に構える外観は、周囲の建物より大きくて堂々としている。その隣の門柱は、この会社が現在地で操業を始めた昭和九年(一九三四)ごろに流行したアール・デコのデザインを思わせる流線型が魅力だ。門の前に立つと、この一帯の町並みが生き続けているのは、久金属工業という強力な磁場があったからだろうと思わせる。

### キャップ生産者の誇り

事務所棟の階段を上ると、そこは応接室。タイムスリップしたような感覚はさらに強まる。天井の球形照明、窓の棧やガラス、そしてユニークな板壁など、どれも竣工当時をしのばせる。時間が止まったままのように感じてしまうのは、古風な陳列ケースにびっしりと並ぶ自社製品のせいであろうか。

久金属工業は創業以来、国内有名メーカーのウイスキー

やベンキ、医薬品などの伍やキャップを製造し、常に大きなシェアを占めてきた。生産の主力は他施設に移転したものの、常に先端を走る製造業の誇りが、古い社屋や工場の磨きぬかれた細部にうかがえる。応接室の向かいには会議室がある。応接室とだいが雲囲気が異なるのは、白漆喰の天井のせいだろう。何より目をひくのは、部屋の中央に神棚が祭られていることだ。そして天井にはいくつもの古い要素を見ることが出来る。まるで、

部屋全体が当時の設備を展示する博物館のようだ。

### 個性が光る建築群

事務所棟を出た通りの向かいには、写植機の発明で知られるモリサワが使っていた工場がある。昭和三十年代、久金属工業がこの工場を譲り受け、鉄工場とした。

再び事務所棟側の工場群に戻ってみよう。中心には三棟の工場がそびえる。小さな缶やキャップを製造していた工場とは思えない壮大な規模

である。

ところで、工場建築といえば画一的なものを思い描いてしまいが、敷地内には実に個性豊かな小建築がひしめく。その一つが当時の社長室。まるで映画のセットのために造られたかのような魅力的な外観、手の込んだ細部である。

工場建築には、都心部の近代建築とはひと味違った輝きがある。いつかここを舞台上に映画が作られる日も来るのではないか。そんな期待を胸に現地を後にした。



上●もと社長室 小ぶりながら、扉両脇に上げ下げ窓を配する左右対称の構成。クリーム色の縦溝タイルの外壁を背に、底の赤いS字瓦が映える。

下●第2工場(左)と第3工場(右) 当時の中心的な生産ラインがあった3棟の工場のうちの2棟。3棟とも現存するが、現在は主に倉庫として利用されている。

第3工場内部 中央の柱に鉄骨を使うほかは木造。屋根を支える構造は、三角形に斜めにのびる木材(洋小屋)と水平垂直の木材からなる部分(和小屋)が組み合わされている。

